



I 今年度の取組と自己評価

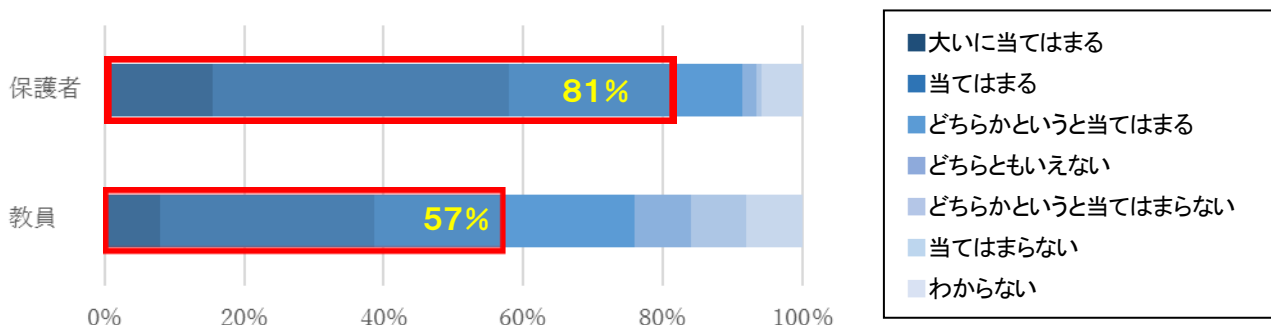
今年度の学校運営連絡協議会のテーマとして学校評価の改善を進め、「簡単で、課題がわかりやすく、改善につながりやすい」視点で、評価項目だけでなく全体の構成も含めた大きな変更を行った。経営計画 ⇒ 学校評価 ⇒ 経営報告 とより分かりやすく連動した形となり、『良い』点や『課題がある』点が把握しやすくなったと考えている。これによる今年度の成果と課題を以下の通り報告する。

※S=肢体不自由教育、N=知的障害教育 自己評価【大いに達成：◎ 達成：○ 一部達成：△ 未達成・未実施：×】

1 重点目標に関する数値目標と実績値 及び今年度の取り組み

重点目標1 併置型学園としての魅力ある教育の充実、発信 【自己評価：○】

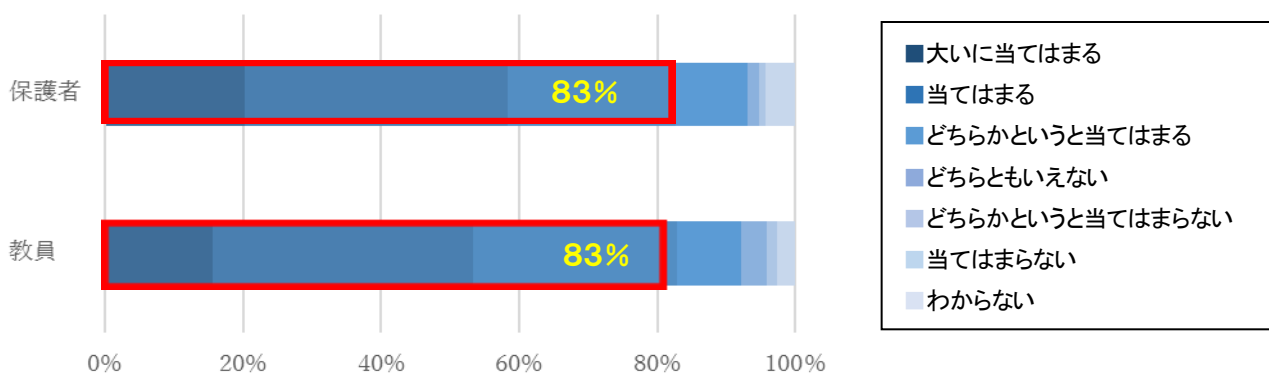
○肢体・知的、両部門合同の行事や活動を推進し、HPや動画による情報発信に取り組んでいる。



肯定的評価は、保護者が81.3%、教職員が57.3%。保護者に比べ、教員の評価はマイナス20ポイントと低くなっている。2年目の取り組みとなる「SN交流ポッチャ大会」等、評価の高い取り組みもあったが、保護者・教員双方の自由記述からは、もっと日常的に交流する場面を増やしたい、といった意見が複数みられた。両部門のニーズや実態にあった合同のありかたや、ウィズコロナといった現在の状況に対応した活動の検討を進めていく。

重点目標2 効率的・機能的な学校組織の確立による組織力の向上と環境整備 【自己評価：○】

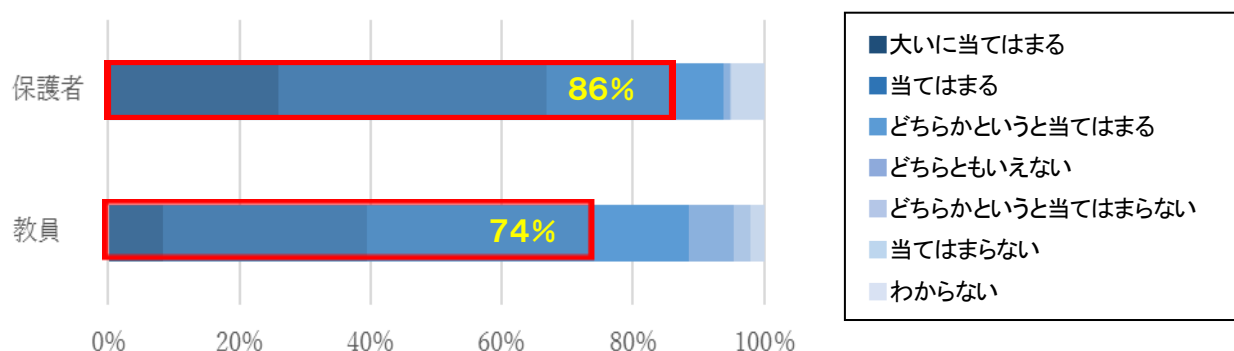
○DXの推進／鹿本学園は、ICTを活用した学習や、種業務のデジタル化に積極的に取り組んでいる。



教職員・保護者ともに「各種業務のデジタル化に取り組んでいる」との肯定的評価は80%以上。しかし、ながら、保護者の自由記述からは「ICTをどのように学校で活用しているのかわからない」「もっとGIGA端末を使用してほしい」との意見もあった。ICTを活用した授業など学校で行っている取り組みを伝える工夫が求められている。これを受け、ホームページの活用やFacebookの更新回数を増やすなど改善に向けてと組みを始めている。

重点目標3 専門性ある人材を活用した教育の充実 【自己評価：○】

○外部専門家を活用した授業改善や教材の充実、アセスメントや学習環境の整備



肯定的回答は保護者 86.2%、教職員が 74%。全体的に高評価となっているが、比較すると教職員は保護者より 12 ポイント低い結果となっている。自由記述を見ると、保護者からはアセスメントでの外部専門家の活用が評価されている。一方で教職員からは、外部専門家による成果を評価しながらも、活用の仕方について改善に向けた意見が多くあげられていた。これについては、今年度改善を進めてきた部分でもあり、引き続き更なる活用・充実に向けた検討を進めていく。

2 学校運営全般の自己評価 (※数値は各項目の満足度を 10 段階で評価し 7 段階以上を肯定的評価として算出した)**<学習指導> 保護者 (90%) 教職員 (37%) 【自己評価：○】**

学習指導全般について、保護者からは高い評価を得ることかできた。「授業」についても 233 名 (80%弱) の保護者から『良い』と回答を得ている。教員の評価は他の項目も含め全体的に低い数字となっている。しかしながら、「授業」について『良い』と回答した教員は 113 名 (55%) いる。自己評価として厳しくつけていることや、5 段階 6 段階に集中する中心化傾向によるものとも考えられる。

「ICT活用」について保護者と教員の評価に差がみられた。教職員は ICT を日常的に学習場面で使用できており『良い』点として挙げているが、保護者は、授業での ICT 活用の様子や家庭での端末の使い方が分からないこと等が課題として指摘されていた。次年度の課題とする。

<生活指導> 保護者 (85%) 教職員 (38%) 【自己評価：○】

生活指導全般についても、保護者から高い評価を得ている。教職員の数値結果との差は大きいですが、項目別の『良い』と感じられる点についての結果は、保護者・教職員とも同じ分布をしていることから大きな問題はないと判断する。教職員の『課題』と感じられる点として「避難訓練」数値が吐出して大きく 85 名 (42%) の指摘があった。感染症対応による制限で十分な避難訓練が実施できていないことが原因として考えられる。全校避難訓練や宿泊防災訓練の再開と合わせ改善を進める。

<進路指導・キャリア教育> 保護者 (62%) 教職員 (34%) 【自己評価：△】

保護者の満足度が他に比べ低くなっている。自由記述から小学部段階での取り組みや、進路に関する情報が十分でないと感じている方が少なくないことが読み取れる。小学部から中・高までの系統的なキャリア教育の実施に向けた、学部を超えた取り組みの充実に取り組む必要がある。

<特別活動・行事・部活動> 保護者 (76%) 教職員 (44%) 【自己評価：○】

保護者、教職員ともに『良い』とした項目のベスト 3 は「体育発表会」「虹輝祭」「校外学習」であり、そのうち「体育発表会」と「虹輝祭」は『課題がある』でも上位 2 項目となっている。コロナ対応で授業時間内に学年・グループ単位での発表とした「体育発表会」。そして、コロナ前に開催形式を大きく変更した「虹輝祭」について肯定的な意見と課題を指摘する意見が多数寄せられている。今後の感染状況に対応しながら行事全体の見直しも行いつつ、整理・改善・充実に取り組んでいく。

<保健・健康（給食）> **保護者（88%） 教職員（57%）** 【自己評価：○】
保護者、教員とも他の項目と比較し高い数値となっている。教職員の自由記述のテキストマイニングから「摂食指導」に関する意見が多いことが読み取れる。教職員の『良い』点、『課題のある』点の両方で一番高い数値となっていることから、特に重要な取り組みと捉え引き続き改善充実に向けた取り組みを進める。

<地域連携と広報活動> **保護者（70%） 教職員（37%）** 【自己評価：○】
数値結果からは目立った課題の指摘は無く、保護者・教職員ともHPや動画配信等一定の評価が得られている。自由記述を見ると、保護者からは学校での子供の様子が分かる情報発信が要望として寄せられていた。一方、教職員からは誰に対する情報発信か、その目的と合わせ再考の必要を感じる指摘が散見された。情報発信にむけた校内の体制・仕組みと合わせ検討を進めていく。

<学校経営>
学校運営全般A **保護者（86%） 教職員（40%）** 【自己評価：○】
・学校だより ・学年・学習グループだより ・マチコミ（メール配信） ・保護者会
・個別面談 ・感染症対応 ・教職員の服装 ・教職員の言葉遣い ・窓口対応 ・施設、環境
保護者の『良い』と感じる事項からは、マチコミ、個別面談、学年学習グループの順で、全体的に高い評価を得ている。一方、教職員ではマチコミの数値が『良い』『課題がある』の両方で多と比べ高い数字となっている。マチコミによる情報提供が増えたことによるメリットだけでなく、必要な情報が埋もれてしまうなど弊害も指摘されている。課題を共有し、一つ一つ着実な対応・改善を継続する。

学校運営全般B（教職員のみ） **保護者（-%） 教職員（26%）** 【自己評価：△】
・分掌組織体制 ・各種会議 ・研究、研修活動 ・外部専門家の活用 ・教員—CG—看護師の連携 ・人材育成
・休暇取得推進、超勤縮減の取組 ・健康管理（メンタルヘルスを含む） ・職場内コミュニケーションの活性化
「外部専門家の活用」や「教員—CG—看護師の連携」については一定の評価は得られたが、全体では、『良い』の全合計263ポイントに対し、『課題がある』は479ポイントと大きく上回っている。中でも「分掌組織体制」と「休暇取得推進、超勤縮減」の二つは他と比較して高い数値となっている。喫緊の課題捉え、すでに取り組みを始めている「Do To Stop 提案～やめてみることをやってみる～」を推進し、業務の縮減や効率化を図り、教職員の「時間をつくる」取り組みを積極的に進めていく。

<研究> **教育活動の一層の充実につなげる全校的実践研究の推進** 【自己評価：○】

- ・全国公開研究会（オンライン・Web開催）を令和4年2月3日（金）に実施。
「鹿本学園の学びの構築」を目指し3ヵ年計画の研究をスタートさせた。

全校研究テーマ

「鹿本学園の学びの構築」／2年次「どのように学ぶか」～主体的・対話的で深い学びに繋がる授業実践

- ・講演 「鹿本学園の学びの構築」
東京学芸大学 総合教育科学系特別支援学校講座 准教授 平田 正吾
- ・分科会 ①「单元の中で『目指す姿』を意識した授業づくり」（S/知的代替、自立活動を主とする課程）
助言者：東京学芸大学 総合教育科学系特別支援科学講座 准教授 平田 正吾 氏 氏
②「児童・生徒主体の深い学びや自己表現手段としてのICTの活用」（S/準ずる課程）
助言者：たすく株式会社 細川 貴 氏
③「深い学びにたどりつく授業づくり（国語、算数・数学）」（N部門）
助言者：上越教育大学 臨床・健康教育学系 准教授 池田 吉史 氏
- ・オンデマンド配信
「児童・生徒の主体的な学びを促進する ～鹿本学園の構造化（コミュニケーションスケジュール、タスクオーガナイゼーション）～」 たすく株式会社 齊藤 宇開 氏

II 次年度以降の課題と対応策

今年度、学校運営連絡協議会の場合も活用し、「分かりやすく使いやすい」という視点で学校評価アンケートの刷新を行った。そしてアンケートの最初の設問に、「鹿本学園の満足度」について10段階による評価を行った。6段階以上を肯定的評価として集計すると、保護者の95%に対し教職員は48%という厳しい現状が数値として表された。その原因のひとつとして様々な活動が再開された今年度も、「これまで通り」や「前年度と同じ」という取り組みは無く、常に新しい対応が求められる厳しい、忙しい状況が続いたこと。また、そうした状況に対応した組織運営ができなかったことが、この数値結果につながったと考えている。

そこで、こうした状況を乗り越え組織として力を発揮するために、まずは教職員が元気になることから始める。教職員一人一人がより力を発揮できる環境の整備や計画を推進する。具体的には、教員同士が、指導や授業作りに必要な対話の時間を確保していく。これにより、子供たちの学習活動も充実したものとなり、これまで以上に保護者の期待にもこたえることが可能になる。そのような流れを作っていきたい。

令和4年3月に特別支援教育推進計画第二期第二次実施計画が公表され、進路実現や医ケアの充実が特別支援学校の重要な取り組みとして示された。学校は、ICT・GIGA 端末の活用だけでなく、行事の在り方や授業デザインについても、時代に応じた変化を求められている。変化する社会に対応し、特別支援学校の役割を果たして行く為にも、まずは教職員が元気なることを意識し、以下の課題への取り組みを進めていく。

★ DXの推進：組織全体であらゆる場面でDXによる改善・効率化にチャレンジ

★ 教職員を元気にする「D o T o S t o p提案 ～やめてみることをやってみる～」の推進

(1) society5.0 社会に向けた教育活動の見直し・改善（ICT活用と感染対策）

- ・全校研究と連動した指導計画の見直し
- ・時間割の検討
- ・ICT、オンラインを活用した学習の充実・推進
- ・GIGA端末の発展的活用や新たな活動の創出

(2) 医ケア実施体制の充実と各種事業の推進

- ・教員—学校介護職員—看護師の連携の強化、学校介護職員を含めた計画的な育成で、実施者を確保する。

(3) 組織運営の見直しと業務の改善、縮減、効率化

- ・各種会議の在り方や設定の見直し、分担と役割の明確化でスピード感のある組織運営
- ・教員とCG(学校介護職員)の情報共有・連携に向けた会議等の改善

(4) 学校評価の活用推進に向けた改善の継続

- ・今年度、刷新した学校評価の改善・充実（学校運営連絡協議会 企画調整会議）
- ・学校運営連絡協議会との連動の強化
- ・学期単位でのPDCAサイクルによるスピード感のある評価と改善（拡大経営会議）

(5) 創立10周年に向けた取り組み

- ・プロジェクトチーム等、校内組織への位置づけ
- ・児童・生徒の取り組み内容、活動計画の作成
- ・記念事業の企画立案
 - ・愛楽曲
 - ・記念ロゴ
 - ・着ぐるみの改修や更新
 - ・学習活動と連動し取り組み